
四鬼～リンクする三頂点～

NANIWA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四鬼〜リンクする三頂点〜

【Nコード】

N7346H

【作者名】

NANIWA

【あらすじ】

数百年前、三つの世界が突如交わった。魔法使い、能力者、武人家の世界だ。これら三つの世界はそれぞれ同盟を組み、自分達の領土を決めた。以後世界は少しの争いを除いて平和になった。それから数百年後、三つの種族が交わる数少ない大都市、三枝町。その町で鬼の力を持つ青年が吸血鬼と遭遇した時、物語は邂逅する

残酷な描写有りと警告していますが、ほとんどありません。少し出るかも程度です。

Case・01 三枝町/噂

「ふあゝあ。眠……」

この国有数の大都市の一つにして三つの人種が混雑する町、三枝町。

その町にある魔立三枝高校1 - Bの教室内にて又神^{サガミ} 京^{キョウ}のあくびが響き渡った。

クラスに居る者全員がぼかんとした表情で又神に視線がいく。

「んあ？」

又神にはそのクラスメートの表情の意味がわからなかった。又神は基本周りから自由人と思われ、又神も自身が思いつくままに行動する。

なので授業中のおくびなんて当たり前。入学当初は様々な教師に注意をされたりなんかしたが、今ではもう諦めているらしい。

それゆえにクラスメートのその馬鹿げた表情は意味不明だ。あくびぐらいで驚くなんて、何を今更……

「さーがーみー？てめえ今私の授業であくびしやがったか？あん？」

そうだった。うかつだった。自分が馬鹿だった。

ほとんどの教師はもはや又神の素行の悪さを注意したりしない。止められないからだ。

だが、一人だけ。唯一一人だけ又神を注意する教師が居る。

それが今又神を睨みつけている目の前の教師、「三枝町の赤い虎」
こと夏川^{ナツカワ} 揺紅^{ヨウコウ}だ。

真っ赤な髪に鋭い目つき、髪色に合わせるかのように少し大きめの赤色ジャージを着ているその姿はコンビ二前とよく似合う。

そう、不良の姿がやけにさまになっているのだ。

それもそのはず。彼女は学生の頃この辺りに住まう不良魔法使い達を締め上げた伝説の不良さんだったりする。

現役を離れてもう四年となるのに、未だその眼光は衰えない不良新米教師。……なんだかその睨みがビームに変わりそうだ。

「ん？どっちだ？答えるコラ。」

ドシドシと赤い虎が又神に迫る。だが又神は恐怖の戦慄に吞まれ

てしまい、言い訳が思いつかない。

「なあ？さあがあみいよー？」

ついに赤い虎は又神の目の前まで来た、来てしまった。

席に着く又神を見下ろしている。これはまずい。何か適当な言い訳で教壇に帰ってもらわなければ。

そう思い、口を開いた瞬間。又神の後ろの席から

「んー……ありゃ？なあなあサガみん。授業終わったん？」

ぶちい！と夏川から嫌な音が聞こえた。後ろの席の寝起き声がトリガーになったのだらう。

まずいまずいまずい！なんとか 出来る状況では無かった。

夏川は何かぶつぶつ唱えると右手を又神とその後ろの生徒にロックオンしてニヤリと、凶悪の笑みを浮かべた。

するとその笑みに呼応するかのようその手から炎がポオツ！と燃え上がり、球体の形に仕上がる。それを見た瞬間に又神は顔の前で両手をクロスしてガードの形をとるが、

「ぶつ飛べ！こんの馬鹿ども！！」

そのガードに炎をぶつけた。とっさに腕に強化魔法を発動したが、それでも熱い。

だが耐えることができたのも一瞬。その威力に耐えれず又神の身体が少し後ろへ下がったかと思っただ次の瞬間には、背後の生徒とともに教室の後ろの壁に叩きつけられていた。

数秒壁に張り付いていた又神と背後の席の生徒、ヤマカタ山形 シンシチ進七はぺらっと紙のように床に落ちる。

「……なあサガみん。どーなっとるんや？これ。」

「……ヤン。テメエの胸に手エ当てて考えやがれ。」

横にぶっ倒れる馬鹿（又神）と頭から床に垂直に倒れて、なんだか面白い形になっている馬鹿（山形）。

その体制のまま行っう会話は奇天烈以外の何物でもない。

「はあ！？胸って何言っとなねん！ワイは男やぞ！」

「ちげえよ馬鹿^{ヤン}。オマエの脳の中に入ってんのは蟹ミソか？そうじやなくて」

「ちょ待てい！今馬鹿って書いてヤンって言ったやろ！！ワイは聞き逃さんぞ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ馬鹿二人。その姿を夏川は教壇から顔を引き攣らせながら見ていた。

同僚達が諦めるのも領ける。又神には何を言っても、いや手を上げても効かないのだ。

馬の耳に念仏、のれんに腕押し。

また一発魔法をぶち込んでやろうかと悩むが、授業終了のチャイムが迫っていたので無理矢理授業へ移行する。

「あー、どこまでやったっけか？……ああそうだ、つまり私達魔法使い、能力者、武人家達の関係はジャンケンに置き換えることができる」

そう言つて夏川は黒板をバンバン叩く。その黒板には白のチョークで三角形が描かれており、その角にそれぞれ「魔法使い」「能力者」「武人家」と書かれている。

「私達魔法使いはほとんどの場合詠唱、呪文が必要だ。タメが長いせいでその隙に武人家どもに狙われ易いが、その反面能力者どもの能力よりは遥かに強い」

夏川はチョークで矢印を書きながら、

「だが能力者は一つの能力、現象しか起こせない代わりに詠唱も呪文もいらぬ。故に遠くからネチネチと武人家どもを攻撃できる」

そして、と夏川はさらに続ける。

「武人家どもはその素早い動きで魔法使い達の詠唱している隙を狙う。嫌なやつらだよな！」

チヨークで武人家と書かれている部分を塗り潰していく。

その姿に生徒達皆が間違いなく恐怖を感じただろう。昔に何かあったのだろうか？

「あ。ははは、悪い悪い」

すると自身の行動に気付いたのか、苦笑いをしてごまかす。ごまかされません、もう生徒達の心にインプットされました。

………トラウマとして。

「ま、とにかく纏めるなら関係的には魔法使いは能力者に強く、能力者は武人家に強い。そして武人家は魔法使いに強い、ということだな。もちろん全てそれでまかり通る訳では無いのだが　む。」

と、タイミングが良いの悪いのか授業終了を示すチャイムが鳴り響いた。

叉神に少し時間を掛け過ぎてしまったらしい。

「じゃ授業はここまで。今ところ多分テストに出す……いや出さないか？まあいいや、とにかく覚えとけ。あとその馬鹿二人は後で職員室に來い、以上！」

不機嫌そうにフンと鼻を鳴らしながらドタドタと教室を後にする赤い虎。

一方、職員室という名の死刑宣告を受けた叉神とヤンは盛大にため

息を漏らす。

「……ヤン、俺帰るわ」

「奇遇やな。ワイも帰るところや」

時刻はまだ五時間目。残すところ後一時間だが二人の意志は固い。

さっそく、とやつと倒れている身体を起こし、自分の席に置いてあるカバンを手にとったところで、

「待ちなさい！その二人！」

制止の声が飛んできた。又神はあいつか……などと軽く予想してから振り向くと、そこには予想通りの人物が攻撃的な目つきでこちらを見ていた。

腰にまで届く綺麗な黒い長髪の彼女は小松^{コマツ}舞^{マイ}。このクラスの委員長&風紀委員に属しているという正に規律の為に生まれてきたようなやつだ。

そんな彼女、小松が堂々とサボリ宣言を聞き入れる訳が無い。

「授業はまだ一時間あるわ。そのカバンを下ろしなさい。」

そして命令口調。教師の次は委員長かと嘆息する。なんだかブルブルな気分になってきた。

それはヤンとしても同じらしく、オーバーアクションでため息を漏らすと、

「なんや委員長、今日機嫌悪いんやな　　女の子の口?。」

キラんと小松の瞳が妖しく輝いた瞬間、まさに一瞬で小松はヤンの目の前にまで迫り、その拳をワナワナ震わせ。

ヤンの顔面に拳をぶち込んだ。

ヤンの身体は軽々と吹っ飛び、先程赤い虎にぶっ飛ばされて激突した壁に再度叩きつけられる。

ぐったりとうなだれていることからして気絶しているのだろう。

そういったところを見ると、あの赤い虎こと新米教師は一応手加減していたことがよく分かる。少なくとも気絶はしなかったのだから。

「学校という公共の場でキサマは何を言うのだ!!! 又神! それもこれもおまえがちゃんと、な!?!」

言葉が途中で止まる。それもそのはず、その言葉を向ける人物がその場に居なかったのだ。

つまるところ、逃げられた。

「うむ、ヤン。テメエのことは晩飯時まで忘れねエ」

その頃、ヤンという名のイケニエが委員長に捧げられている隙に逃亡を成功させた又神は靴箱の所で自分の靴に履きかえていた。

まだ下校時間では無いが靴箱付近は若干混雑している。体育の授業帰りだろう。

「そーいや最近『能研』の族達がやたらと俺達『総会』に絡んでくるらしいぜ？」

「あ、それ知ってる！なんか『吸血鬼』を見たか、とか聞いてくるんだろ？」

ふと、そんな噂話が耳に入った。ほお、と又神は腕を組みながら校舎を出る。

魔法使い、能力者、武人家達にはそれぞれ総称で呼べるものがある。

魔法使いは「魔法総合協会」、略して「総会」。

能力者達は「能力研究開発機関」、同じく略して「能研」。

武人家達は「武人連盟」、これも略し「武連」といったようにそれぞれ呼ばれている。

そして先程の噂話にあった「能研」の族達というのは能力者で暴走行為を行う者達のことだ。

そういった者達は魔法使いや武人家達の中に居るので何ら珍しくない。ただ叉神の興味を引いたのは

（吸血鬼？）

血を吸うあのメジャーな魔の類いのことだろうか？

この国で言うところ妖怪。

……さて、だれがそんな噂を創ったのやら。

だが悲しいかな、嘘話と分かかっていても確認してみたくなるのが人の性。

今日の夜にでも暇だったら行動してみようか。そう考えに至ったところで自分が校門から出ていたのに気付いた。

「ハッ、吸血鬼　　鬼、ねエ」

そう呟いて空を見た。

又神の中には鬼が宿っている。いや、鬼の力と言つべきか。

又神の父は神父だった。とても優しく、身寄りの無い子供を拾ってきてはそれを迎え入れた。

同じく又神の母も子供達を迎え入れ、本当の母のように振る舞っていた。

当時はわからなかったが、今になって思い返すとそれは幸せな日々だったのだろう。

十年前のあの日が訪れるまでは

「う、ぐっ！」

喉から熱い何かが込み上げてくる。又神はとっさに口を抑えそれを飲み込み、荒い息を整える。

今思い返してもこのさま。当時はまさに地獄だったと言える。

そしてやっと調子を取り戻すと自身の手の平を見た。少し集中して力を込めると、先程赤い虎こと夏川教諭が見せたように炎がボォッと燃え上がる。

さらに集中して自身の力を操るとその炎の塊が突然水の球体に変わった。

これを誰か他人が見たら驚くだろう。炎から水へ変わるなど何も無い所から何かを創り出す並に難しい、いや難しいどころではない。

これが、叉神の鬼の力。叉神には六つの、魔法に似ていて魔法ではない鬼の力が使える。

身体を金属のように硬くする力。

自身の存在を薄め、気配を絶つ力。

火、水、風、地を自在に発生させ操る力。

そしてこれらに一致する鬼が居る。

それが藤原千方に仕えたという四鬼である。

身体を硬くする金鬼、風を起こす風鬼、洪水を起こす水鬼と気配を絶つ隠形鬼は他の伝承ではそれぞれ土鬼と火鬼として言い伝えられている。

………なんとというか、そうなのだろう。藤原千方に仕えた四鬼とやらが叉神の中に居るのだろう。

あくまで予想の範囲でしか無いが。

鬼という共通項があるせいか、気になる。

「さアて。夜まで何すつか………な？」

ふと、前方にある公園に目がいった。いや目がいかざる得なかった。

子供達の遊び場所、ほほえましい光景があるべきその場所には

「見つけたぞーらあ!!」

「今日こそ仕留めてやんよ!!」

学生服を着たむさ苦しい男達によって公園は占拠されていた。

うわー、と思わずジト目になってしまふ。

これが先程述べていた「能研」の族達だろうか?とにかく関わりたくない。

触れぬ神に祟り無し。そう思い違う道で帰ろうとしたのだが、

「……………はああ、クソツ！意味ワカラネー!!」

公園に向かって走り出した。見てしまったのだ、公園内にむさ苦しい男達と　　女が一人。

どう見たっておかしいだろ。又神は俺ってホントお人よしだよな、と心の中で毒づく、その手に風鬼の力を宿す。

そして公園内に入り、それをボールのように投げた。

何人が又神の存在に気付いただろうか。だがもう遅い。賽は投げられたとはこの事か、いや違うか。そんな事を考えながら獣のような獰猛な笑みを浮かべ、

「弾け飛べ！馬鹿！」

パシユン！と又神の投げたものから割れた音が辺りに響く。

その瞬間、その音を中心に風が吹き荒れた。

「な、何だ！？誰の能力だっ！！！」

誰かがそう叫んだ。周りの学生達はその風に吹き飛ばされるか、その場で必死に踏み留まるかである。

だがその中で又神はひよひよいと動き回り、その場で必死に踏み留まっている女を見つけた。

茶色い髪は肩に掛かる長さ。目はキリツとしており、勝手な推測だが姐御肌な感じがする。

桜色のパーカーが無意味に良く似合っていた。

年上だろうか？そんなイメージを持ちつつ又神はその女の元まで辿り着くと、その手を掴む。

「まったく、オイ。さっさと逃げんぞ。」

女は理解出来なさそうに顔を歪めた。だいたい予想がつく。

自分だってわかる。馬鹿だってことぐらい。普通の人ならまずこんな集団の中に入って来ない。見て見ぬフリだろう。

いや、実際見て見ぬフリをしようとしたのだが。

そうこうしている内に風の威力が弱まってきた。そろそろ歩くこともできるはず。

「ちっ！悪い、先に謝っておくぞ！！」

「え、え？」

苦肉の策発動。作戦名『お姫様抱っこ』 効果、有無を言わず逃げることができる。

又神は作戦名通りその女を抱え、公園の出口に向かう。向かっているさなか、又神は気付いた。この作戦の弱点を。それは

(ぬあっ！？なんかめっさ見られてる気が……)

弱点、とにかく恥ずかしい。女からはとにかく視線を感じるし、これを街中でやったらソイツはただの羞恥心を楽しんでいる変態なんだ。

とにかく解放されたい又神は自然とその足が早くなる。だが、悲し

いかな。学生の一人が又神の足にしがみつく。

「だああ！この野郎　！！」

回し蹴りをするかのように足を振り上げて学生の拘束を振りほどく。

そして出口まで向かい、公園から出ると手近にあった路地裏へ逃げ込み、そこらしばらく走った。

なんだか今日は逃げてばかりだし、この後も逃げ続ける予感があった。

嫌だ嫌だ。心の中でそう呟くが声にはしない。嫌味みたいに聞こえるだろうから。

そう考えながら又神は女を見た。女はポリバケツの上に座っている。

女は沈黙。危機は無事に去った。ぶつちやけこれ以上関わっても良い事が起こる気がしない。というよりは悪い予感しかしない。

「んじゃ、気をつけ」

「私を、助けたの、かい？」

遮られた。君子危うき所に近寄らず、遠ざかろうと思って別れの言葉を告げようとした矢先、質問されてしまった。

というより何？その質問？

「ああ？んー、まあ目の前の危機からは、助けた、かな？うわっ、なんか恩せがましいな！？」

自分で言っていてそう思う。なんか自分が嫌な悪役になった気分だ。

すると女は余計理解出来ないとわんばかりに、

「助けた？私、を？……なんで、だい？」

「あ？なんで？んアー……理由は特にねえよ。強いて言うならオマエがピンチだったから、だなア」

理由としては本当にそんなものだ。別に見返りが欲しかったわけでもなんでも無い。

………実のところ気まぐれが結構な割合で占めていたりする。

「おかし、いよ。なんで私なんかを助けたりするんだい！」

だが女の方はとうとう混乱の極みに達したらしく、立ち上がるとまくし立てる勢いで又神に責め寄る。

普段ならその勢いに吞まれていただろう。が、又神はカツとなる感情を抑え、

「『なんか』じゃねえ。自分をおとしめんな。オマエはオマエしか居ないんだから、よオ？」

そう言っつて女の頭を軽く叩いた。全く不愉快な事を言っつてくれる。

ついつきブルーな気持ちを捨てたばかりなのに。

この時又神は知らなかった。女の顔が驚きと喜びに染まっていたことじつ。

この時気付いていれば、あるいは未来が変わっていたかもしれないことじつ。

Case・02 お喋り/吸血鬼

「で。俺ア又神京、オマエは？」

時刻は夕暮れ時。おそらくは放課後。

そんな中、又神は謎の女と某ファーストフード店に来ていた。

何故ここに居るのかというと、あの後。又神はそそくさと逃げ帰ろうとしたが、女に手首を掴まれ、

『あ、えつと……オレイをさせて欲しいんだけど……』

『……………何故カタコト？』

といういきさつがあり、連れて来られたのが某ファーストフード店ということである。

……………実はあまり感謝されていないのではないだろうか？

他にもそう思う要因がある。この店でおごってくれと述べ、適当なセットを頼んだ。

そして謎の女ははた迷惑なことに数分そこで悩み、注文をした。

そこまでは良かった。いろいろ言いたい事があつたがまあ良しとできる。

だが、彼女がガマガチのついた財布からソレを取り出し、店員に渡した時。又神は固まった。

店員の手の中にはどこの国かわからない硬貨があった。もちろん店員苦笑い。まだ笑えていただけでもたいしたものである。

きつちり五秒間停止する又神。そして錆び付いた人形のようにギギギと首を動かして女を見たが、女は何故か堂々としている。

……………結局、この店は又神のおごりになった。女の財布の中身を見たが全部どこの国かわからない紙幣や硬貨ばかりだった。

もう充分。お腹いっぱいです。そう言いたいがかく一番言いたい事がある。

又神は女に視線を向ける。女の方はというと物珍しそうにハンバーガーにかぶりついている。

それだけなら平和な光景だ。だが又神は彼女の横のテーブルを見て、

「ごんだけ食うんだよ……………」

そこにはトレイにこれでもかと積まれたハンバーガー。ここまで

積みまるとなんだか食欲が失せてくる。

しかもこれは又神のおごりだ。塵も積もれば山となる。一つの値段がどれだけ安かろうが、これだけ頼まれれば又神の財布の中身を真冬に戻すことぐらいたやすい。

「チクショー、今月の家賃が……………」

「……………」

「不思議そうな顔すんじゃねエ！！それよりも名前だ、名前！」

どつと疲れが増す又神。これがヤンなら間違いなく殴って埋めている。

名前を聞くのに出会ってから何分が経ったのだろうか？

女は言葉の意味をちゃんと理解してくれたらしく、困ったような顔を浮かべた。そして咀嚼をしていた口を止め、

「ばばぢぐあい？ばばぢば」

「飲み込んでから喋れ」

正確にはその類いっぱいのハンバーガーを良く噛んで飲み込んでから話せ、だ。

すると女は恥ずかしそうにコクリと頷き、飲み物で胃に押し込んで口の中を空にした。別に急がなくてよかったのだが。

「んぐつ。私かい？私は………糸杉。糸杉、アヤメだね」

そう言ってカラツとした笑みを浮かべる。なんとというか、豪快だが、名前を言う瞬間。何か違和感があった。気のせいだろうか。

「ふーん糸杉アヤメ、ね。それで糸杉。なんであいつらに襲われそうになつていたんだ？」

やっと本題。ここに行き着くまでが長かった。そう、又神はこれが聞きたかったのだ。

今日、帰る間に聞いた吸血鬼の話。予測するに能研の族達が追っている、とのことだった。そしてこの目の前の女、糸杉アヤメは能研の族達に囲まれていたのだ。まさか！と思うのも当然だろう。だが。

「んー？あああれね。あいつらが子供達を怖がらせてたから出て行って言ったらね………なんかいっぱい出て来たってことよ、いやあ、あれは驚いたなあ、さすがの私も。」

そう言って豪快に笑う姿からは驚いた雰囲気も出ていません。というよりあれだけ積まれていたハンバーガーがすでに無いことの方が驚きです。いつの間に………。

そして今はストローを加えジュースを飲んでいる。

「はーん。そりゃまた勇気のあることだ。」

そう嫌味つたらしく言ってみるが糸杉はそうだろ？と嬉しそうに

するだけ。どうやら遠回しの表現は効かないらしい。

それにしても、この糸杉とかいう女。

(良いやつっぽいな。)

普通数人だったとはいえ族達に注意しに行ったりしないだろう。ほとんどが見て見ぬフリだ。

だが、注意しに行ったということは馬鹿が正義心に満ち溢れているということか。

そういった奴は嫌いではない。

「そーいやオマエ所属は？総会？能研？武連には見えねエが……」

「私や能力者だよ。一応だけど」

何か含みがあるような言い方をする。おかげで聞きたいことが聞けなくなった。

数人とはいえ族達に注意しに行くことはそれなりに実力を兼ね備えているはず。どんな力を聞いたかったのだが、一応なんて言われたら聞きづらい。

「……ま。人それぞれっつーことか」

当たり前障りの無い程度で適当なことを言う。そう言っている間にもどうやって能力を聞き出すかなーと考えていた。

ふいに又神は糸杉を見る。糸杉もこちらを見ていて、不思議そうな顔を浮かべている。

「あ？どした？」

「え？いや。あんた、じゃなくて又神は総会だろう？普通自分とは違う組織の者は毛嫌いするもんだ、って習ってたものだからさ……ほら、なんか又神全然変わらないから変だなって思っただけよ」

「あー俺そーゆうのどーでもいいって思ってたからなア。所詮じじい共が勝手に対立してるだけだしよオ」

そう、今でもこの三組織は仲が悪い。理由は知らない。だが授業などで他の二組織は悪いやつだ、などと言っから今の世代まで仲が悪いのだ。別に他の二組織にだって良い奴はたくさん居る。又神はそれを分かっているのでそういった教えには惑わされない。

事実、能力者にも幾人か友達と呼べる者も居たりする。

「ふふつ。又神は変わっているなあ」

「変わってねエよ。つーかいずれ皆こーなんじゃねエの？」

又神の告げた適当な未来を頭に思い描いたのか、糸杉は軽く微笑んだ。

叶わないと分かっているてもそうならいいな程度で。

「そオいえばなんでオマエ俺が魔法使いってわかつたんだア？」

話題変更。そういえば先程糸杉が又神の所属が総会である事をさ

りげなく当てていた。

確かに公園で風鬼の力は使ったが、それだけで魔法使いと決めつけるには材料が少なすぎる。

「さっき列んでいる時に又神を指差している学生さん達が居てね。その話をこっそり聞いてわかったのさ。又神、あんた有名人だね。」

私や鼻が高いよ、と又神の肩を叩く。一方又神はがっくりとうなだれた。まだその噂流れてんのかよ、とぼやきながら。

「で、又神。あんた何をしたんだい？」

「べーつにー。第一そいつらがしてる噂は去年のモンだよ。普通に時効だ。」

又神がまだ高校に入る前の出来事だ。ちょっとしたことだから又神は有名になってしまった。ただそれだけの話である。

だが、なるほど。理由がわかった。どうやら糸杉はなかなか目ざとい奴らしい。

さて、と又神は立ち上がる。

「ん？帰るのかい？」

「ああ、バイトがあるんでな。遅れたら店主に殺されちまう」

「ははっ、おっかないのね」

全くだ、と二人して笑う。そして笑い終わったところで、

「んじゃアな。またどっかで見かけたら声掛けてくれ。そんな時こそ奢れよ?」

「うへえ。じゃ声掛けないね。」

そんな冗談を背に又神は店を出た。

「いつかここで殺されちまう……………」

バイト帰り。綺麗な三日月が浮かぶ中、又神は人通りの少ない元商店街を歩いていた。

つい最近この三枝町の商店街がここから別の場所に移され、今ではこの場所は不良達のたまり場と化している。

そんな場所で又神は一人で愚痴を漏らし続けていた。
愚痴の内容はバイト先のことである。

中華料理屋で個人経営の店のくせにその辺りのファミレスと変わら
ないくらいの店舗だ。

その割りには店員が少ない。ゆえに店員一人一人が働く量がすごい
多いのだが、そこまでならまだ許容範囲。

ひどいのはその店の店主だ。ちよつとでも休憩しようとするはずぐ
包丁を投げってくる切れ者である。

当たれば冗談では済まないのだが、あの店主の場合は冗談で済ませ
うとするだろう。

「あー、なんか、もう。吸血鬼とかどーでもいっかなア？」

とにかく疲れた。今日は夜のバイトも無いし、ゆっくり休もう。

そう思い、気持ちをリラックスさせながら帰るさなか。

辺りが静か過ぎることに気付いた

「……………ありえねー。」

又神の声が元商店街に響く。そう、有り得ないことが起こってい
るのだ。

先程も述べた通り、この元商店街は不良のたまり場と化している。それは昼や夕方だけでなく、もちろん夜も。

だというのに、誰も 居ない。

「……出る、ザンバトウ斬羽刀。」

突如、又神の右手の先の景色がひび割れ、ぽっかりと穴が開く。そしてそこから棒のようなものが突き出ており、それを躊躇なく引っ張り出す。

又神の右手にあるのは刃。西洋剣や刀といった美しいものからは掛け離れた、包丁をそのまま巨大にしたような剥き出しの刃がそこにあつた。

斬羽刀。飛んでいる鳥獣や竜の羽を切り落とす為に造られたニメートルは余裕である両手剣だ。又神は片手で持っているが。

「ハッ、異空間に入れといて正解だったなア」

魔法使いの強みの一つとして異空間というものがある。先程又神が見せたように空間の中に自分の所有物を入れ、必要となつたら空間を割って手にする、言わば金庫のようなものであり、又神は重宝している。

だが、実際のところ又神のように武器を扱う者はそれ程居ないので他の人は必要なかは定かではないが。

又神は斬羽刀を構えながら慎重に歩を進める。その作業を行いな

がら左手でブレザーの内ポケットを探り、そこから長方形型の紙をいくらか取り出した。

又神の魔法はこれを、つまりは符術を用いる。鬼の力は魔法ではない。魔法に似ているが魔法とは非なるもの。どちらかと言えば能力者に近いのだろう。

だが、そんなことでは魔法使いとしてやっていけない為に又神は魔法を必死に練習した。結果から言えば惨敗。練習してもしても皆が扱うような魔法は使えない。

普通ならそこで諦めるかもしれない。自分には才など無いんだ、と言いつくして。だが又神は諦めず、自分に合っている魔法を探し続けた。

そして行き着いたのが符術。

魔法総合協会内を見回しても数人しか居ないであろう魔法の類いである。

何故数人しか居ないのか。それはおそらく準備が大変だからだろう。

ほとんどの魔法使いの場合。その場で詠唱や呪文を唱えるだけで魔法が扱える。

が、符術師の場合は前もって準備をしなければいけないのだ。

符となる紙に呪文を書き、それに魔力を込めて一枚出来上がり。そ

れを何十回と繰り返す。

つまりいざという時の戦闘には不向きだ。ゆえに人気が無い。

（俺ア符術結構好きなんだがなア………あ。そろそろ符造らないといけねエな。めんどくせーやっば符術嫌エだー）

そう心の中でぼやきながら符を一枚投げ捨てる。符はヒラヒラと重力に従い落下していくが、地面スレスレの所で止まった。

そして符が動き出す。

又神が発動したのは探索魔法。誰でもいいので自分から近い人物の所まで連れていくように、という指示付き。

符はその命に従い、スムーズに進んで行く。すると不意に横道に入った。いや、横道というよりは路地裏に似ている。

そして入った瞬間、符は停止した。誰か居たのか？そう考えて符の先を見た時、又神の表情は凍り付いた。

そこに倒れているのは、血だらけの男。いや、男達。十数人単位で地面に突っ伏しており、辺りは血の海。

「オイ!!!大丈夫かッ!!!」

「、あ」

慌てて又神は駆け寄り、倒れている一人の男を抱き起こす。するとすごく小さい声が出た。

同じように又神は倒れている者に声を掛けたり脈を計ったが全員生きていた。

こんな血の海状態でよく死人が一人も出ていないものである。

「待ってるよ、今救急車呼んでやっからよ」

そう言っただけで又神は倒れている内の一人のポケットをまさぐり、そこから携帯を取り出す。そして指紋が残らないように番号を押し、救急車を何台か手配してもらおうよう頼んだ。

「　　。　　。今頼んだからあと十分くれエで来るだろオ。それまで生き繋げる。」

そう言っただけで又神は男達の倒れている先の暗闇を覗む。まだ血の匂いが奥からするのだ。

又神は再度斬羽刀を固く握り締めるとその暗闇に向かって歩を進める。

「これは洒落にならねエぞ？」

奥は酷い有様だった。歩を進める度に大勢倒れている箇所を目にした。

もう四回ぐらいだろうか？血の海を渡ったのは。

「あー、これ匂いとかつかねエかなア？」

だが又神はそんな光景を見ても臆さない。確かに酷い有様だった。見た目だけなら少しだけ又神が過去に味わった地獄に似ている。

だが決定的に違う事。それは生死。驚くことにここで倒れてる者達は全員ちゃんと生きているのだ。

それが、決定的なまでに違う。

「んア？」

さらに進んでいくと少し開けた場所に出てきた。相変わらずコンクリートの壁に挟まれて圧迫感があるが先程まで通っていた道よりマシである。

先程の道が一人分ならここは数人程度がたまり場として使えるような場所だ。

そんな場所で。血を啜る奴が居た。

そいつは倒れているやつ腕に噛り付いている。叉神の立ち位置からは見えない。ただその額に仮面らしきものがあることだけ分かる。するとそいつは叉神が居ることに気付いたのか、一瞬全ての動きを止めた。そしておおむろにその仮面を付けるとゆっくりと立ち上がった。

その仮面はジェイソンが付けていたような仮面だった。目には小さな穴が二つ。鼻の筋にも穴がいくつもある。

だがジェイソンと違うのはその仮面に牙が描かれていること。

そう、それはまるで学校で聞いたあの噂

「吸血、鬼!」

瞬間、そいつは倒れるようにスタートダッシュを切った。その手を叉神に向ける。手にはとても人間とは思えない程長く、鋭い爪が！

「爪が、武器かよッ！！」

そう叫ぶように言うと叉神はその右手で掴んでいた斬羽刀を横に振るう。だが、そんな中で不幸が、いや叉神の浅慮のせいで不幸が起こった。

斬羽刀が壁に刺さっていた。ここはコンクリートの壁に挟まれた決して広くない空間。

そんな所で二メートル以上ある斬羽刀を振るうことなど、できるはずがない。

「ちっ！！こんな時に、よ！！」

叉神はとつさに斬羽刀から手を離しその場にしゃがみ込む。しゃがみ込む際、すでにそいつ、吸血鬼は目の前まで来ていたらしく、何本か髪の毛を切られてしまった。

だが最大のチャンス。叉神は吸血鬼がまだ前に突き出していない片方の手を掴み、そのままタックルの形で吸血鬼を押し倒した。

そして倒れた際に仮面が外れかかったらしく、吸血鬼は先程叉神の髪の毛を切ったその手で仮面を元の位置に戻そうとして、

「ハッ、捕まえたぜ？」

その手を叉神に掴まれてしまう。

「!?」

必死に叉神の拘束を振りほどこうとする吸血鬼。すごい力で時々離しそうになるが力で鬼が負ける訳にはいかない。又神も必死で押さえ込むと、吸血鬼は無駄だと感じたのか、それとも殺される覚悟でも決めたのか、その力を緩めた。

するとその様子に叉神は満足そうに頷くと、一仕事を終えたかのよう。

「やーっと、話し合いが出来るぜエ。つたく……」

そう言って

吸血鬼の手を離れた。

その行動があまりにも予想外だったのか、吸血鬼は声を出しそうになるがそれを飲み込む。

何故離したのか？何故殺さないのか？吸血鬼の頭の中に疑問付が浮かんでいく。

だが又神からすればこの吸血鬼は人を殺してはいないのでまだ説得の余地がある、と判断したまでのことだ。

「さアて。落ち着いたか？んじゃま平和的に話し合いを

「

とまで言った瞬間、救急車のサイレンが響き渡る。なんとも間の悪い。

救急車とともにパトカーのサイレンまで聞こえている。これは見
つかったらかなりめんどくさそうだ。

「クソ、しかたねえ。場所……って?」

一瞬のことだった。一瞬吸血鬼から目を離しただけで、そこには
もう吸血鬼は居なかった。
つまりは逃げられた。

「……………俺も逃げよ。」

はぁ。とため息を漏らしたくなるのを我慢し、壁に刺さった斬羽
刀を引き抜いてから異空間という名の金庫に仕舞う。

そして二枚の符を先程のように投げ捨て、地面スレスレの所で止ま
ってから叉神はその上に足を乗せる。

「飛べ。」

その言葉だけで符はぐいっと上昇し、叉神の視線はあつという間
に高くなった。

簡単に言うなら空を飛んでいる。

先程まで建物の間みたいな閉塞した空間に居たせいか、一気に広が
る視界はとても清々しいものがあった。

(それにしても、あの……吸血鬼。あいつ一体何なんだ?)

そう考えながら又神は空を見上げる。

空には赤い三日月が浮かんでいた

「以後注意するように。今度やったら屋上から落とすぞ」

「……………すみませんでした」

昼休み。又神はその顔に痣をつけて職員室を出た。
何故こうなったか？それは昨日の又神の行いである。

昨日、職員室に来るよう言われたが又神はその指示を無視し、それを聞いた赤い虎こと夏川揺紅の燃えるような怒り（本当に燃えて職員室はボヤ騒動になったらしい）を買ってしまい今日に至る。

くつろいでいる朝の一時、夏川は教室に乱入しては又神に何発もの魔法と拳をぶち込んだ。

そしてそれだけでは飽き足らず、昼休み開始のチャイムとともに現れては又神を職員室、ではなくその隣にある誰も使わなさそうな資料室に拉致し、そこで気分が晴れるまで暴行され最後は説教で終わった。

……………教育委員会に訴えてもいいと思うのは又神だけなのだろうか？

とにもかくにも解放された又神は一直線に保健室に向かう。痣だけならまだいいが切り傷もところどころあるからだ。

「まったく。金鬼になる余裕もねエもんなア。絶対魔法使いよりも武

人家に向いてンだろ。」

金鬼。又神の鬼の力の一つで身体を金属のように硬くする力なのだが、それを発動する間もなく拳を撃ち込んでくるものだから防ぎようがない。

魔法使いとは思えない程の俊敏さである。又神も人の事は言えないが。

「つと。ここか。失礼しまーす」

又神は保健室に着くと最低限のマナーとして軽くドアを叩く。それから乱暴に開けるとその先には予想通りの人物が椅子に座り、今日は新聞を読んでいた。

咲野^{サキノ} 秋^{アキ} 灰色の長髪に真ん丸眼鏡。白衣を着ていなければお嬢さまという単語が浮かんできそうなのこの女性は分かると思うがこの保健室の先生である。

咲野は最初こそ又神の方を見たがすぐに新聞に目を落とし、

「またおまえか……。」

「またおまえか、じゃねーっすよ。っつーかあの虎どーにかして下さい。狂暴どころじゃねェ」

そうぼやきながら又神は勝手知ったるなんとやらのように柵から消毒液や、その他必要なものを取り出し、消毒液を切り傷に当てる。

「仕方ないであろう。というよりおまえが揺紅の神経を逆なでして

いるのだろうか？」

「……痛いところ突くっすね。医者が患者の心を傷つけたらダメっしょ？」

「知らん。私の役目は患者の身体を治すこと。心の傷は精神科にでも持って行け。そうしたらどっちもボロ儲けだ。」

「確信犯ツ！？うわー、最低な医者がここに居ますよー！みなさん気をつけてー！」

そんなどうでもいい会話をしながら絆創膏を切り傷の箇所貼る。

この保健医。落ち着いているように見えて実は赤い虎、夏川揺紅と同じ年で同じく新米教師だったりする。

普通新米教師なら夏川程では無いだろうがそれなりに何事においても熱心だろう。

だがこの咲野秋からは全くそんな熱心さが感じられない。それどころか、

「つーか患者の身体を治すこととか言いながら、あんた全く俺の怪我見ようとしねエじゃん。」

「おまえの傷は見飽きた。というより私はできるだけ仕事をしたくないのだ。自分でできることは自分でしろ。」

新米教師にあるまじき発言。そう、この保健医は生粋のぐーたら人間なのだ。

仕事しなくても生きていけるならしな。でもそういう訳にはいかないから。そんな理由でこの学校の保健医になった咲野だが又神からすれば果てしなく心配である。

何と言うか、この人間の将来と怪我をした生徒達の将来を、だ。

「その辺りは安心しろ。こんなおおざっぱな真似、おまえにしかしていない。」

「俺は安心できねエ!? 学校の教師は生徒に対して公平であるべきだろ! なんて俺に対しては不公平なんだよッ!？」

「私だけではない。他の先生方もそんなものだ。」

「まじでッ!？」

徐々に学校の実態が暴かれていく中、咲野は変わらず新聞を讀んでいき気になった記事があったのか、会話が止まりその記事に目がくぎづけとなる。

この状態になったらもう話しかけても意味が無い。どんなに話しかけても無視されるからだ。たまに煩いと感じるのかビンタが飛んでくることもあるが。

又神は嘆息し、了承は得ていないものの一睡しようと保健室に備えられているベッドに向かう。

身体的にも精神的にも赤い虎のせいで疲れ、今はとにかく寝たい。

「ん。今日はダメだ。使用している者が居る。」

白いカーテンの仕切を開けようとしたところで咲野に止められる。見ると新聞を閉じ、立ち上がったところだった。

誰だよ俺のベッド使っている奴、とあまりにも理不尽な文句が出そうになるが、気になることがありその言葉は引っ込む。

「今日はやけに元に戻るの早いつすね。」

そう、普段ならこの咲野医師。気になる本や記事があればその世界に入り込んで少なくとも一時間は戻って来ない。

だが今日は奇跡的に数秒で元に戻ったのだ。かなりどうでもいいが気になる。

「うむ。読み終わったからな。端っこにある記事であまり詳しく書かれていなかった。」

「へエ。どんな記事だったんすか？」

そう言って又神は咲野から新聞を受け取り、先程開いていたであろうページに目をやって、やっぱな。と心の中で呟いた。

本当に端っこの方に書かれた記事。そこには『元商店街に吸血鬼現れる？地元の青年ら四九名重傷』とある。

「なんでもその被害者達には牙を突き付けられた痕があるらしい。さらに言つと全員血が少なくすぐに輸血をしたそうだ。」

そう言いながら咲野は自分が愛用している熊のキャラクターが描かれたカップにコーヒを注いでいく。

「その時誰かから通報があったらしいぞ。現場にはもう居なかったらしいが……私が思うにその通報した者が怪しいと思うのだが、どうだろっ？私の名推理は。」

「……………」

その名推理はご破算です、咲野教諭。その誰かは又神なのだから。だがそうなると、と咲野迷探偵はコーヒーを啜りながらその頭を無駄な方向に働かせる。

又神はその姿に長嘆すると、新聞を閉じてその辺りに置き、立ち上がると保健室の扉に手を掛けた。

「ん？戻るのか？」

「ああ。コーヒーが出てくる訳でもねエしベッドは誰かに使われているしな。優等生らしく授業に出るっすよ」

「それは優等生ではない。当たり前だ。」

うるせエ。そう言いたくなるのを飲み込み、その言葉を背に保健室を出た。

さて、次の授業は何だったかな？

放課後。又神はすぐに教室を出ると新商店街をぶらぶら歩いていた。

今日は中華料理店とは別のバイトがあるのだが、中途半端に時間が余っている。

さて、この時間をどのように潰そうか？

「ゲーセン、か。あんま好きじゃねエけどたま、に……は？」

賑やかな音が漏れているゲームセンターの前で足を止めると見たことのある奴がそこに居た。

糸杉アヤメ。昨日公園でピンチに陥っていた女だ。

その女がルーレットで賞品を当てるゲーム機の前で何やら唸っている。

……これは関わるべきでは無いのだろうか？

心なし周りの人達も糸杉を避けている気がする。

話しかければ間違いなく又神も周りから変な目で見られるのだろうが、一応知り合いなので話しかけない訳にもいかない。
又神ははあ、とため息を漏らした。

「糸杉……オマエ何してんの？」

「ひゃあ！？つて、あ。又神か。驚かすんじゃないよ。」

驚いたー、と盛大に息を吐く糸杉。又神からすれば普通に話しかけただけなのだが。それよりも。

「ひゃあ、つてオマエ案外女らしい声出すんだな。」

「そりやどーゆう意味だい？又神い？」

深い意味はありません。と又神は糸杉の怒氣的なものが籠った視線を受け流す。

このままではいつか拳が飛んできそうだ。それを察知したので又神は本来聞きたかったことを尋ねることにする。

「で。何していたンだア？」

「え？あ、これかい？えつと……」

たじろぐ糸杉。そう、もとより又神は糸杉の奇怪な行動が気になつていたので。

糸杉はえーっと、あーっと

と意味の無い言葉を連呼しながら

先程へばりついていたルーレットゲームを隠すように手をバタバタと振っている。

だが残念な事に又神は糸杉より身長が高く、上から覗き込むようにそのルーレットゲームを見た。

「んア？ペンギンの、人形？」

そこにはルーレットとそのルーレットに止まった際にもらえる賞品の一つにペンギンの人形があった。

位置的におそらくこれを凝視していたに違いない。

これが欲しいのだろうか？

又神は財布の中身を確認する。百円玉が一枚………
なんだか虚しい気持ちになりながらも、一枚しか無いんならやってみてもいっかー、という気分になる。

「これは……その、なんだい？別にそういう訳では　へ？」

何やら必死に言い訳をしている糸杉を無視してそのルーレットゲームに硬貨を入れた。

すると甲高い音とともにルーレットが回り出す。

ピピピと円をなぞるように光が回っていく。

叉神は集中して光を目で追っていく。そして、

「ここかア!!」

ボタンを押す。そしてそれとともに光が徐々に遅くなり、その光は

賞品ゲットの二つ手前で止まった。

「あ、あゝ。」

「ぐアアッ!?俺のなけなしの百円がアアア!!」

二人ともがつくりとうなだれる。惜しかったことも重なってガツカリ度は普段の二倍増しだ。

「悪いな、取ってやれなくて。」

「うん……………って別に私ゃこんなものいらないよ!?あ、なんだい!その目は!」

ジーツと叉神の視線が糸杉に突き刺さる。糸杉は叉神を殴ってやめさせようとするが、ひよいひよいその拳を避けられる。

疲れたのか、糸杉はぜえぜえと肩を上下に揺らし、当たらないと悟ったのかその拳を引っ込める。

「……はあ。又神、あんたも暇なんだねえ？こんな場所ろちよろしてさ。」

「そのセリフ、そのままバットで打ち返してヤンよ……そういや糸杉。オマエ何歳？」

ふと、そんな事が気になった。糸杉は私服で昨日もまだ学校が終わっていない時間だったのに公園に居た。

確かに姐御肌な感じはしていたものの、まだ成人ではないだろうと予想していたのだが、案外大人なのかもしれない。その考えに至り、そう聞いてみたのだが

「えと……又神は何歳だい？」

何故か聞き返されてしまった。何故？年齢を聞くのはタブーだったのだろうか？

「俺は十六で高一だ」

「んー、じゃ私もそれで。」

「どーゆうことだよッ!？」

なははー、と笑ってごまかす糸杉。つまり年齢は秘密、ということか。

又神としては少し気になっていった内容なのだが、ごまかそうとしている程聞かれたくないのならしかたない。

はあ。そう息を漏らした時、ふと他人の会話が耳に入った。

「やっぱり吸血鬼って居るのかな？」

「ばーか！居ないに決まってるだろ。だいたい」

ゲームセンターの騒音でその声は掻き消された。辺りを軽く見回してもその声の主は見当たらない。

吸血鬼、はたして声の主は何を思っ居ない、と言っただろうか。

「居ると思う？」

単なる話題繋ぎの為か、彼女はそう聞いてきた。何が？と聞き返すのは流石に空気が読めていない為、又神は軽く頷いた。

「居るんじゃないの？ま。俺アそんなことはどーでもいいや。もしも居るとしたら聞きたいことはあるけどなア？」

「ふーん。何を聞くんさい？」

そうだなア、と又神は考える。実際言われてみたらすぐには思いつかないものだ。

そして何個か質問を思い巡らす、やはり一番聞きたいことといえば昨日の事に関する事だろうか？

「棺桶で寝るのか、とか大蒜は本当に苦手なのか？とかあるけど、今は昨日の事件の事を聞いてエかな？なんでこんな事をするんだ、ってなア。」

「それでどうするんだい？」

「あ？……どーするだろオナ？そいつアそんな時に決める。ただ

」

そこで叉神は言葉を止める。もしもその吸血鬼がどうしようもなく悪いやつで改善しようの無い奴だったのなら叉神はそいつを見捨てるかもしれないし、諦めずに改善させようとするかもしれない。だが、もしもその吸血鬼が悪くないのであれば。もしも改善しようのある奴なら

「救いてエな。救いようのある奴なら。」

それが叉神の結論。昔は力が無く、救いたいものがあっても、ただそれが壊れていくのを呆然と見るだけだった。

でも今は違う。無敵でも最強でもないが、それでも昔よりは遥かに力がある。それなら。それならその力で救えるだけ救いたい。

「叉神。私はそいつは救いようのない奴だと思う。」すると糸杉が少し強張った表情でそう呟いた。その時だけ、姐御肌な雰囲気が無くなる。

「なんで？そいつア少なくとも誰も殺しちゃアいねエ。それは心の中の良心的なもんが少しはあるから、じゃねエのか？」

「……………その吸血鬼は悪意を持ってそうしたのかもしれないよ？」

ホオ、と叉神の目つきが鋭くなる。正直糸杉がそんなマイナス方向の発言をするとは思ってもみなかったが、他人の意見も取り入れ

たい今となつては少しありがたい。

「もしかしたら吸血鬼は本気で殺そうとしてたかもしれないよ？けど吸血鬼にとつて何らかのアクシデントがあつて最後まで出来なかつた……それに昨日だつて青年からの通報が無かつたらその四九名は全員死んでいたかもしれない。そんな風に叉神は考えたりしないのかい？」

「ハッ、そうだな。そう考えることもあるかもな。ただなんでもか知らねえが不思議とそう思えねエんだよ」

昨日遭遇した吸血鬼からは殺氣らしいものは感じなかつた。それはつまり殺すつもりはなかつたのだろう。

第一吸血鬼が殺す気で動いているのなら、能研の族達も吸血鬼を捜したりしない。自分から殺されに行く馬鹿がはたしてどこに居ようか？

「んア？なんか、オカシイぞ？」

ボソツと、糸杉に聞こえない程度に呟く。そもそも能研の族達は何故吸血鬼を追っているのだ？

何か因縁のようなものでもあるのだろうか？とにかく調べてみる価値はある。

「つてもうこんな時間か。悪い糸杉、俺バイト行くわ」

「うん？ああ、そのゴメンな？なんか暗い話をしてしまつて。」

「ハッ、気にすんな……そういやオマエ携帯とか持つてねエの？」

今思えばこうしてたまたま会った時に話すぐらいなら電話やらメールとかで話した方が早い。そう考えてのことだったのだが、

「悪いね。私やそーいった文明の機器は持ってないんだよ。」

「だろオナ。そーゆう顔してる。」

どついう事だい！？という糸杉の怒声を背に又神はゲームセンターを出た。

また今度、と言っていないが何となくまたどこかで会える気もするし。

そう考えていると、前方の方に銀色のアタッシユケースを持った中年の男が見えた。

又神は頭をかく動作をすると、中年の男は又神に気付いたのか、さりげなく近づき、

「頼みましたよ」

そう言っつてすれ違いざまに又神に銀色のアタッシユケースを渡した。又神もそれを自然に受け取り、そのままその場から立ち去った

Case・04 運び屋/病院

又神は銀色のアタッシユケースを持ってとある喫茶店に入った。有名なチェーン店で店内にはクラシックか、落ち着いた音楽が流れている。

「いらっしやいませ。お一人ですか？」

「はい。窓際の席をお願いします。」

ニコツと営業スマイルを見せる店員に対して又神も普段見せないような営業スマイルを浮かべた。

又神としてはめんどくさい極まりないのだが、これも雇い主の方針しかたがない。

「あ、はい！こちらへどうぞ！」

すると店員は少しぎこちない動作で又神を窓際の席に案内する。どうでもいいがこの店員は新入りだろうか？よくこの喫茶店に来るのだが、この店員は初めて見た。どうでもいい話なのだが。

又神は席に着きコーヒーを頼むと、ちらつと隣の席に座る客を見る。

黒いワイシャツに黒いサングラス。あごひげを生やした細身の男が

そこに居た。

「……………」

又神はそつと隣の席の男が座っている足元にアタツシユケースを置いた。

運び屋。それが又神のもう一つ行っているバイト。

ほぼ毎回中年の男から荷物を預かり、そしてこの隣の席に座る男に渡している。この隣の男も同じ運び屋なのか、それとも荷物の受取人なのか、それは知らない。

普通運び屋の仕事はなんでも深く詮索してはならないのだ。それは相手の為でもあり自分の為でもある。

（けどあの中って何が入ってんだろオナ？）

一瞬アタツシユケースに目がいくがすぐに逸らす。どうせ分からないし別にいいだろう。それに仕事はもう済んだ。

あとは注文したコーヒーを飲んで帰るだけ。金は後日振り込まれるだろう。

そう考えているとちょうど先程の店員がその手にコーヒーを持って又神の席まで来た。そしてコーヒーを置くとそそくさと奥に引込んだ。

そのぎこちない行動に又神はどうしたのだろうか？などとどうでも

いい疑問を頭に浮かべながらコーヒを一口、口に含むと。

「ふっ。どうした？今日は冴えない顔をして。」

「んア？」

又神は声のした方向。隣の席を見た。隣の席に座っていた男は新聞を広げ、目をそこに固定させたまま又神に話し掛けていた。

又神も慌てて、でも表情には出さないように視線を元に戻す。せつかくさりげなく座ってこの男とは知らない者同士として演じているのに真正面から話したら意味が無い。運び屋として失格である。

「ふむ。その若さで中々……君は優秀だな。」

男は感心したように言う。確かにここまで状況を読んで行動する若者はそうは居ない。

そういった意味では又神は変人の部類に入る。

「ハッ、そりゃどオモ。それにしてもいいンすかねエ？この仕事に関わる者同士、互いの素性は探ったらダメなんじゃないンすか？」

「……やはり君は優秀だな。その若さでそこまで裏側のルールを知る者はそう居ないぞ。」

男はそう言って笑みを作った。笑い声こそ出さないが本当におもしろいらしい。

「だが、雇い主たる私が話したい、と言えば君はそれに従わざる得ないのではないか？」

な！？と声が出そうになった又神だがそれを抑えた。今、何と言った？

「……アンタが雇い主だったのかよ。」

「いかにも。」

この隣の席の男が雇い主。つまり、運び屋業界的に言わせてもらえば極限接触は控えたい人物だ。何に巻き込まれるかわかったもんじゃない。だがしかし。

(あれの中身が気になる……！)

又神はちらつと目だけを動かし銀色のアタッシュケースを見る。この男が雇い主なら中身ぐらい知っているだろう。そして前から又神は中身が気になっていたのだ。

聞きたい。だが好奇心は猫をも殺す。やっぱやめよう。

すぐに結論は出た。今までの経験上関わっちゃあいけないと身体が叫んでいる。

ゆえに又神は己が疑問を忘れることにし、男の問いに答えることにした。確か何故冴えない顔をしているのか、だったはず。

「あー、さっきの質問なんすけど俺そんな冴えない顔してますかねエ？」

「ああ。もう何度も君の顔は見ているからね。と言っても眉間にシ

ワができているのに気付けばだれでもわかるか。」

「む。」

そう言っで手で触つてみると確かにシワができている。気付かない内にあの事でも考えていたのだろうか？

さて。この雇い主という男にあの事を相談してもいいのか？男は聞きたそうにしているが。

「……はあ。その新聞の端の記事見て下さい。ちっさい欄のニュースです。」

「ほお。吸血鬼、か。何々？現場に四九名の地元青年が倒れて重傷。全員多くの血を失っており、何者からかの通報があつたおかげで大事には至らなかつた、か。これがどうしたのかな？」

男は男で興味深そうにその記事に目を通していく。さて、ここからどう話が繋がっていくのだろう、というように。

「その通報したのつて俺なんすよ。吸血鬼にも会いました。」

へえ。それだけ言つと男は黙る。続きを言えつてことか。

「現場は悲惨でしたねエ。辺り一面血の海。しかもそれが五ヶ所もぶつちやけ常人が見たら気絶するか吐いてるでしょオね。」

「その言い方だとまるで自分は常人ではない、と言つているみたいだね。……いや、悪かつた。続けてくれ。」

迂闊だった。つい口を滑らせてしまった。今のは叉神のミスである。よりよって素性も知れぬ人物に情報を与えるなんて。それにしてもこの男、油断ならない。これは喋れば喋るほど泥沼に嵌まる恐れがある。気をつけなければ。

「……まあそれで吸血鬼に会ったんすよ。それで何とか話し合いに持っていけたんすけど、ちょうどそこでパトカーやら救急車が来てしまつて……おかげで聞きたかつたことが聞けなかつた、つてエ話なだけつすよ。」

男はふう、と息を漏らすと新聞を閉じタバコを取り出した。そして火をつけ一度吸うと、

「何を聞こうとした？」

「んア？聞きたいことはたくさんあるんすけど、まずはなんでこんな事すんのかつて聞きたいつすね。でも次どこで会えるかわからないんすよねー」

そう。昨日の夜は偶然だった。おそらく吸血鬼が気まぐれである元商店街に寄つたのだらう。

そしてそこはたまたま叉神の帰り道で出会ってしまった。こんな偶然、二度もあるはずない。

そう。偶然で会おうと思えば

「その顔……何やらまだ手はある、という風に見えるが？」

男はそう言う。たいした観察眼である。男の言う通り確かにまだ手はある。

それは能研の族達だ。確か噂では能研の族達は吸血鬼を捜している、とのことだった。それは何故？どんな目的が？

とにかくわからない。あの吸血鬼に関することは全くもって謎だ。何故こんな事をするのかも不明。

とにかく今は一つでも情報を集めなければ。集めた情報の中にヒントがあるかもしれない。しかし、

「……昨日被害にあった能研の奴らに話が聞きたいんすよ。けど病院がどこにあるのか」

わからねエ、と舌打ちした。新聞にはどこの病院に運ばれた等書いてはいないし、仮に書いていたとしても警察がその辺りで警備しているだろう。

そうなれば、こんな一介の高校生が被害者に話を聞くなど、到底無理だ。

「……ふむ。では私が手伝ってあげよう。」

又神がありとあらゆる可能性を模索している中、男がそんな事を言った。

手伝う、と。正直又神としては危ない橋は渡りたくない。こういった人達は必ず後から見返りを要求するはずだ。多大なる要求を。

「手伝って何の得になるんすか？」

「得？ そうだね、私の謎の真実を知りたい、という願望が満たされるよ。」

警戒しながらそう尋ねるとそんな答えが返ってきた。男の様子からして嘘を吐いている感じはしない。

どうやらこの男も、又神と同じで自分が興味を持ったことはとことん調べないと気が済まないタイプらしい。

さて。イマイチ信用ならないが、後から何か要求されてもその時はその時だ。今は使えるものは最大限に使わせてもらおう。

「ハッ。じゃあ頼むとしますかア」

三枝総合病院。そこに被害者である能研の族達が居るとのことで、男に車に乗せられここに連れられてこられた。又神は警戒していた。この病院ではない。男に、だ。

男は車の運転中、どこかに電話を掛け、それだけでこの場所を捜し当てた。すごい情報網である。しかし、それが男の不気味さをより醸し出していた。

「私、こういう者です。被害者の子達から話を聞きたいのですが…」

受付。男はそう言つと手帳らしきものを見せる。又神はそつとその手帳を見て驚愕する。

その手帳は警察の持っているものだ。名前のところには水島雄太と書かれている。

「あ、はい。どうぞ、五階と六階です。」

どうも、と男は頭を下げエレベーターへ歩く。その後に又神は着いて行き、己が疑問を口にした。

「アンタ、本当に警察の者か？ワリイが俺にはそう見えないぜ？」

ちょうどエレベーターの扉が開き、中に乗り込む。五階のボタンを押して扉を閉じた。

エレベーターはゆっくりと目的の階に昇っていく。その間男は終始無言だった。防犯カメラ対策なのだろう。

そしてエレベーターは目的の階に着き、そこから出た所で男は口を

開いた。

「君の直感通りだよ。私は警察ではない。これも偽物さ。」

やはりそうか、と又神は男を見る。この男が簡単に正体を明かすなんて確かに思っではいなかったが。

「はーん。やっぱね。まあいいや。その名前も偽物だろオけどアンタのこと水島って呼ばせてもらうぜエ？」

「ふ。話し方もやつと砕けてきたな？私的にもその話し方のほうが好ましい。私も君のことは又神君、とでも呼ばせてもらうよ。」

やはり侮れねエ。又神はそう心の中で呟いた。又神は自分の名前を言った覚えは無いというのにこの男、水島は名前を知っている。

たいした情報網だ。この調子だと自分の過去もすでに知られている可能性が高い。

「さて。君の求めていた情報源はこのフロアと上だ。どこから行く？」

そう言われ又神は周りを見渡す。名前を見ても知らない名ばかり。それなら、と又神は適当な部屋に入った。

部屋は消毒液の匂いで包まれていた。ベッドは四つ。そのベッドに横たわるのもちろん四人。その四人はそれぞれ身体のどこかに包帯を巻き、その包帯も血に染まっている。

中々に悲惨な状況だった。だが、そんな状況でもベッドに倒れてい

る者達は又神を見るなり眉間にシワを作って、

「なんだ、てめえ……?」

とご挨拶。なるほど、確かに入院前ならさまになっていたかもしれない。だが包帯でぐるぐる巻きにされベッドに横たわっているその姿は滑稽以外の何物でもない。

吹き出す一歩手前だ。現に水島に至っては顔を隠し、声を押し殺して笑っている。

「いや、なに。テメェらに二、三聞きたい事があってなア?」

「はあ!? ふざけんなよ、てめえ?」

だからそんな格好で強気に出ないで欲しい。笑いそうだから。又神は笑いを押し殺してからため息を漏らすと、指をパチンと鳴らした。

その瞬間、ボーリング球ぐらいの大きさの火の塊がベッドに横たわる男達を一齐に取り囲む。仕方がない、実力行使だ。

「俺ア別にふざけてはいねエよ。それなりに真剣だ。……で、オマエら。ここで俺の問いに答えて無事退院するか、俺の問いに答えず一生入院か、どっちがいい?」

ニコリと、悪魔のような笑みを浮かべた。心が何だか痛むがこれくらいしないとこのゴロツキ共は答えてくれないだろう。

そして又神の予想は当たり、男達は答えますと顔面蒼白で言った。

「よし。じゃあまずオマエらは能研の族か？」

まずはそこから問い質さなければならぬ。新聞にはあくまで地元の青年らが重傷としか書かれていないので、どこに所属する者なのかわからないのだ。

もしこれで能研ではないと答えられたら質問が一つ減ってしまうのだが、男はコクリと、肯定の意味で頷いた。

「……………んじゃこの質問答えれるよなア？なんでオマエらは吸血鬼を追っていやがる？」

昨日吸血鬼と少し交えただけでよく分かる。あの吸血鬼は強い、と。少なくともここにいるメンツでは倒すどころか、傷一つ付けることもできないだろう。

だというのに、何故吸血鬼を追う？

「しよ、賞金が出るんだ……………」

「あ？賞金だア？」

又神が話していた青年とは違う、ここの中では比較的気弱そうな青年がそう言った。

「へ、変な白衣を着たオッサンが変な仮面が写っている写真を見せてきて、この仮面をつけた吸血鬼を私の前に連れて来てくれれば一千万をやるっ、って。」

なるほど。それで能研は必死で吸血鬼を捜していたのか。やっと又神の中で一つの疑問が解けた。

しかし一千万の賞金を出すと言った白衣のオッサンとは誰なのだろう？

「それで捜してたら、昨日……」

「ん？あア、そうだ。昨日の話をしてくれ。」

青年はそこで止まる。しかしその顔は次第に青くなっていく。おそらく昨日の悪夢を思い出しているのだろう。

言いそうでもない。そんな状況が数分経ったが又神は特に急かしたりはしない。誰でも嫌な事は思い出したくない。又神にしても何年も前の地獄を思い出すだけで、今も吐き気が込み上げるのだから昨日の今日なら、特にそうだろう。そうして又神は辛抱強く待っていると、青年の顔はだいぶ良くなり、ついに口を開いた。

「俺達は吸血鬼が夜にしか戦闘をしない事を知った。だからまずは昼間、まだ日が昇っている内に吸血鬼を仕留めようとしたが、ことごとく逃げられた。」

うんうんと頷きながら又神は吸血鬼って昼間は棺桶に入って寝てんじゃないの？等とこの場においてどうでもいい疑問が浮かんだ。もちろん口に出さないが。

「そ、それなら次は待ち伏せをしようってことになったんだ。吸血鬼の行動の一つに人通りは少ないが人が多い場所に現れる、っていうのを逆手に取ってね。それで昨日、元商店街で集合したら……」

確かにあの元商店街なら誰も通らないだろう。不良達の巢窟等と呼ばれているし、そんな所を帰り道に使うなど又神以外居ない。

それで四九人が待ち伏せたが返り討ちに遭った、と。

「あ、あれは地獄だった……」

「……そオカ。悪かったな、辛い事を思い出させちまってよオ？」

そう言つと又神は青年達にくるつと背中を向け、扉へ歩く。

だがそこで又神は思い出したかのように、あアそうだ。と再び青年達に向き直り、

「死体が無い場所を地獄とは呼べねエよ。むしろ天国だ。^{ハッピー}」

そう言つて、又神は病室を出た。

「わかつた事はあるかね？」

病院を出た所で水島はそう尋ねた。それに対し又神は肯定の意味で頷く。

「少なくとも小一時間前よりは。まア、賞金を出すとか言った白衣野郎の話を聞くのは忘れてましたかねエ？」

病室を出る前に振り返ったあの時。本当はその白衣の男について聞くつもりだったのだが、気付けばあんな言葉が出ていた。

自分が思っているよりも地獄という言葉に敏感になっているのかもしれない。

少し自己嫌悪に陥っていると水島が車に乗り込み、

「乗っていくかな？家まで送るが。」

だが又神は首を横に振る。まだ家には帰らない。やりたい事があるから。

男は又神の考えを察すると、そうかと呟く。ここからは又神の行動を見れないのが残念らしい。

「ふむ、では何か頼み事があつたら私に電話をしてくれ。これが電話番号だ。」

水島はメモ用紙に自分の携帯番号を書き込むと又神に渡す。それから車のエンジンをつけると、

「では、良い夜を。」

そう言つて水島の乗った車は走り去った。ふう、と又神から疲れの籠った息が漏れる。

どうもあの男、水島は油断できない。油断した隙に何をやられるか

分かったもんじゃない。けど

「しばらくは付き合ってもらおうぜエ？」

車が見えなくなっから、又神は不敵に笑いそう呟いた。

「オマエ。まずはどこから行きますかねエ、っと。」

又神は歩き出す。赤い月の下、様々な場所を頭の中で思い巡らせながら

「やっぱり、送ってもらえばよかった……」

がっくりうなだれる叉神。三枝総合病室から見慣れた光景の場所に
戻るまで約一時間。まさかそんな遠い所まで行っていたとは思わ
なかった。

いくら考えながら歩きたかったからってこんなに疲れるなら乗れば
よかった。自分の行動の浅はかさが悔やまれる。

「あー、ちよい休憩すつかなア？」

そう言つて叉神は近くの公園に入り、ベンチにもたれる。夜風が
少し汗ばんでいた身体には心地良い。

一息つきながら自然に携帯を見るとメールが二件入っていた。

メールボックスを開き、見てみるとそこにはエセ関西弁の悪友、山
形ことヤンの名前が表示されている。

二件も何の用だ？と思いつつ、まずは先に着信したメールを開き
すぐ削除した。

そこには無駄であろう話が、しかも長文で記載されていたのだ。絵
文字が多いのが少し苛立つ。そして後から着信したメールを開こう

として止まる。はたしてこのメールも駄文が書かれているのだろうか？

だが二件連続メールが送られて来たということは少なからず何らかの用があるはず。そう信じ、又神はメールを開く、が。

「……………はア。」

メールを削除し携帯を閉じた。

メールを開き、最初に見た文章は『しかし夏川センサーも困ったもんやなー』というものである。

駄文決定。又神は再び携帯を開き、ヤンからのメールを拒否設定にしてから閉じる。

さて。これからどうしようか？先程から能研の族達が集合しそうな人通りの少ない場所を見回っているのだが、能研の族達は一向に見つかりそうにない。

「第一族の集合場所なんぞ、同じ族じゃねエとわからねエ……………そオか、居るじゃねエか！最強の不良が！！」

すると又神は何か思いついたように携帯のアドレス機能を開き、な行の段を見る。

そこには赤い虎こと夏川揺紅の名が。

そう、昔この辺りをシメていた赤い虎なら敵である能研の族達の集

合場所を知っている可能性がある。

「ったく。俺がどオしよーもねエ生徒でよかつたぜエ」

昨日、呼び出しを無視した又神は本日昼休みに夏川教諭にボコボコにされた。そして説教に加え、今度からすぐに呼び出せるようにと又神の携帯アドレスと電話番号を登録していったのだ。もちろん又神の携帯にも夏川の携帯アドレス、電話番号を登録させられた。あの時はこれで常に命を握られるハメに……等と憂いていたが、まさかこんな所でそれが吉と出ると思ってもみなかった。

又神は夏川の電話番号を押す。すると二度程着信音が鳴った後、もしもしという夏川ではない声が聞こえた。

「んア？えつと、これって夏川センサーの電話番号、つすよねエ？」

『ああ、そつだ。その声は又神か？』

夏川の携帯に電話を掛けたのに夏川ではない女性が電話を出た。しかもあちらは又神を知っているらしい。

「あー、そーいうアンタはどちらさんで？」

すると電話越しから小さな笑い声が聞こえる。わからないのか？
と言うように、

『私だ。よく怪我を見ているではないか。』

今の言葉、この淡々とした口調。思い当たるのは真ん丸眼鏡の灰色長髪、白衣を着た

「咲野、センサー？」

『うむ、やっとわかったか。』

そう、又神の高校の保健医、咲野秋である。というより何故保健医が？

『私と揺紅は昔からの馴染みでな。今日も今日とて揺紅が一人では寂しいと言うから夕飯を食べに来てあげたのだよ。』

『勝手に人の家上がり込んできたやつが何言ってるの！っーか私の携帯勝手に取るなよ！！』

夏川の声が電話越しに聞こえる。ふむ、夏川センサーと咲野センサーが幼なじみだというのは意外だ。

そんな感想を抱きながら電話越しに聞こえる争いを待つ。勝手に電話を取った咲野が悪いのは明白なはずなのに何故か夏川が押され気味である。口喧嘩、弱すぎる…………。

『悪い悪い、えーっと又神か？何の用だ？この私に。』

『…………デートのお誘いかもしれんぞ。』

うるさいよ！と夏川が咲野を制する。やっと電話を取ったかと思つとこれだ。本当、仲が宜しいようつで。

『コホン。で、何の用だ？又神。』

「……残念ながらデートのお誘いじゃねエっすよ。」

『わ、わかってるっつーの！おまえまで私をからかおうとするな！』

中々おもしろい、と又神は咲野保健医が夏川をおちよくる理由がわかった気がする。

もうちょっとおちよくりたいが、それはまた別の機会にしよう。今は残念ながら忙しい。

「夏川、センサーって四年程前までこの辺りの不良達のボスだったんすよね？んじゃ能研の族達の集合場所とかってわかるっすかア？」

『はあ？いや、まあわかるけど……そんなこと聞いてどーするんだ？ってか今私の名前呼び捨てで言おうとしただろ！？おい！』

「気のせいっすよ。それよりも！どこなンスかッ！！」

お、おう。と珍しくまくし立てられた夏川は驚きながらもえーっとなんと思いだしながら答える。

『地元の能研なら多分廃工場じゃないか？確か今の族長は三桁クラスだったな。』

「げ。そりゃ若いのにすげエこった。」

世界中に能力者は何千万人と居る。その能力者達の中でも特に優秀な者達にはナンバーが割り振られる。一桁から四桁、つまりNO・0からNO・9999までである。

同じ桁内では強さはほぼ皆一定だ。つまり二桁なら二桁同士実力は拮抗する。だがぞろ目のクラスだけその桁の中では一際強い。そして桁が変わると強さは一線越える。

つまり一桁クラスは能力者界の頂点と言える。

ちなみに叉神は能力者で何名か友達は居るが、全員ナンバーは与えられていない。それ程ナンバーを持っている人物というのは珍しい。そんな人物が族のトップ。何故才能ある者はそういった道に行くのだろうか？能研の族長や夏川などだ。

『確かぞろ目じゃなかったけど、ありゃあ鍛えればいつか二桁ぐらいはいくな。おい！それよりもなんでそんな事を……………』

「ありがとうございましたア」

プツン、と電話を切る叉神。余計な事を詮索されるのはごめんだ。電話が掛かって来ないように、と電源も切った。

さて。とりあえずは向かう先が決まった。

「廃工場ねエ。まるで吸血鬼の為にあるよオなもんじゃねエか。」

廃工場。元はある魔法具を大量生産していた工場だったのだが、その魔法具が生産禁止になった為、この工場は現在使われていない。

何故か壊される事も無く、能研の族達のたまり場と化していた。

「あー、すげエバイクの数。俺入ったらぶっ殺されねエかなア？」

廃工場近くの茂みから叉神は見ていた。廃工場前に並べられているバイクは百は越えているだろう。つまり単純に考えてもあの中には百人近くの能力者が居るということだ。

そんなのが一斉に襲い掛かってきたら肉塊に変わってしまう。

どうにかして中を探れないだろうか、と頭を働かせた所がか過ぎることに気付いた。

静

「しまっ

クソッ!!」

突如又神は茂みから飛び出す。何故すぐに気付かなかった？百人近く居ればいくらなんでも騒がしいはず。だというのにこの静けさはありません。

何故この廃工場に近づいた時に気付かなかった？この違和感、昨日も味わったというのに　　！！

廃工場のスライド式の扉を開く。そして昨日感じた違和感、昨日の光景とともに戻ってきた。

「ハッ………ちょい遅かったかア？」

そこは、昨日見た倍の血の海だった。百人近くの能研の族達が地に伏せている。

そしてその中央で全身に返り血を浴びた、吸血鬼が佇んでいた。昨日と同じジェイソンに牙が生えたような仮面を着けている。

「よオ。昨日振り。」

「……………」

又神は軽そつな調子でそう言つと、近くに倒れている者の脈を確認する。

脈は動いている。息もしている。よく耳を澄ませば何人かは呻き声を上げていた。

やはり、この吸血鬼はこんな惨状を作り上げはするが誰一人として殺してはいない。

「で、昨日の話の続きだ。話し合おうぜエ？話し合って解決できることも、まアあるだろ。な？」

「……………」

無言。又神の問いに返答する訳でも、頷く訳でもない。ただただ無言。

これに付き合っていたら何時間掛かることやら、と又神はその無言を勝手に肯定と捉え、口を開く。

「それじゃあまず何でこんな事しているんだ？」

「……………」

「あー、質問変えて、オマエは本当に吸血鬼なのかア？」

「……………」

「え、えつと。オマエを追っている白衣を着たオッサンの事は知ってんのか？」

「……………」

「あー、んー、えー……………」

「……………」

撃沈。試合終了。又神は辺りが血の海なので手をつくことはでき

「……………殺さない理由、教えてやる。」
「なッ!？」

吸血鬼がついに喋った。その声は高くも無く低くも無い。だが、そこには感情らしい感情が一つも無い気がした。その感情の無い声でボソリと漏らす。

「死人の血は、不味い。だから生かしている。」

「……………はあん。なるほどねエ。」

そうかそうか、と頷く。コミュニケーションが取れたことを喜ぶたいところだが、そうもいかなかった。今の言葉が本当なら、話は許されない方向に行きつつある。あるのだが、はたしてそれが本当の理由なのだろうか？

どうもこれは探ってみる必要がある。

「何？オマエ美食家なのか？」

「……………別に。ただ生きる為の食事、だ。どうせ同じ食事なら美味い方がいい。それだけの事だ。」

これでお話はおしまい。そう言いたげに吸血鬼はゆらりと動き出す。だが、次の叉神の一言で吸血鬼の動きは止まった。

「ふうん。じゃあ俺の血を定期的にくれてやる。だからこんな事はするんじゃないエ。」

吸血鬼は驚いたように身を固くした。この男は何を言っている？
吸血鬼である者に向かって、血をやる？

それはつまり自分から餌になる、と言ったのだ。

「それ、は……………」

「ハッ。なアんで迷うのかなア？」

迷う理由などほぼ無い。もし今のような事を続けられればいずれ捕まり、何らかの処罰を受ける。

それならそうなる前に安定した供給パイプを求めるはずだ。なのにこの吸血鬼は又神からの申し出を悩む、いやどう断ろうか考えている。

つまり、これを自身で辞めることができないのだ。やはり、誰かが裏で操っている。

「なア。いい加減こんな事はやめ　　って、おい!？」

一瞬の出来事だった。吸血鬼は再びその脚力で又神へと駆ける。だが今回は又神も油断していなかったので突撃してきた吸血鬼を避けることができた。

戦闘なら間違いなく吸血鬼はその駆けている方向を又神へと修正するはず。だが吸血鬼はそのまま駆け抜け、この廃工場を出て行ってしまった。

ぼかーんとその後ろ姿を見つめる又神。そしてやっと思考が追い付

いたところで悔しそうに一言。逃げられた。

「あー。救急車何台頼めばいいんだア？」

又神は適当な人物の携帯を手にそう呟く。さすがにこれだけ大勢の被害者を一つの病院では収まらないだろう。

それはそうと何台頼もつか？そう考え出したとともにこの廃工場の中で、いや又神の背後から一つの気配を感じた。

ゆっくりと又神は振り返る。するとそこには一人の青年が居た。髪はワックスか何かをつけているのか、不自然な光沢があり、髪型は真ん中で分けている。こんな場所に居なければ普通の学生に見える。だが見えるだけであってこの場所に居るということは少なからず普通ではないのだろう。

その普通そうに見えて普通では無いであろう青年は辺りを見回し、

「どうなっただあぁー!？」

と一吠え。その叫びに反応するかのように気絶はしていない幾人かが、ううと呻き声を漏らす。

「す、須川族長お……」

「どうしたんだこれは!？」

慌てて須川族長と呼ばれた青年は声を上げた男に近寄る。一方又神はあれが族長？と眉間にシワを作っていた。確か話によれば族長は三桁クラスで実力者らしい。だが目の前の須川族長と呼ばれた青年は全く強そうに見えない。

「俺様が気絶している間に何が起こったんだ!?」

ん？気絶？今族長らしからぬ変なキーワードが聞こえた気がする。気のせいか。

「はい……族長が吸血鬼来襲で気絶していた間、我々は必死に抵抗しました。ですがすぐに壊滅され、族長だけでも、と我々の体で見えないように隠しておりました。」

……やっぱり気絶したらしい。何というか、何とも弱っちい族長である。

「ケケケ！よくやった！それでこそ我が部下だ！」

しかも最低だった。その須川族長とやらが悪魔のように見えてきた。須川族長はその報告した部下をその辺りにぼいっと捨てると又神を見てくる。そして、

「つまり貴様のせいだなこの吸血鬼め！俺様が直々に成敗してやる！」

「はア？何言ってるの、オマエ。」

何だか知らないが敵意を示された。もはや意味不明。

「吸血鬼を倒したってことになりやあチームも俺様も箔が付くつてもんだ！俺様の野望の為にも死にやがれ！」

そう高らかに叫ぶとおもむろに制服の内ポケットからナイフを取り出して又神に見せた。

「どうだ？怖えだろ？」

「あ？いや、まア」

「ちっ！ならこれでどうだ！」

須川という族長は再び内ポケットに手をつ突っ込むと、今度は数本のナイフを取り出し、再び又神に見せる。

「どうだ？刺さったら痛えぞ？だからあの、あれだ！降参しろ！」

「はア？なんで？」

まさか、と又神の頭の中で一つの予想が立つ。こいつまさか能力者じゃない、とか。

能力者じゃなければもちろん能力は使用できない。そんな状態では吸血鬼と思っている又神に勝てるはずない。だからこの青年は嘘を武器にしているのでは？

だが、その予想は半分間違いだった。

「降参しないのなら、あれだ、死ねえ！！！」

その怒号とともに須川という族長はナイフを放り投げる。するとそのナイフは地面に落ちることなく、空中で制止し、刃が叉神に向いた。

「能力、ねエ？確かオマエ三桁クラスなんだろ？」

「ケケケ、よく知ってるじゃねえか！そう俺様はNO・595、能力はスカイハイ〔空中浮遊〕だ！！行けえ！！」

その命を受け、ナイフは叉神に向かって飛んで行く。だが叉神は避けようとしなない。代わりに一言。

「金鬼。」

本来ならナイフは叉神に突き刺さるはずだった。

だというのにキン！という甲高い音とともにナイフは地に落ちる。金鬼。身体を金属の如く硬くし、いかなる攻撃をも弾く。それはナイフも例外ではない。

「へ？」

そんなマヌケな声は須川という族長からのもの。目を擦るともう一度叉神をよく見る。うん、どこにも傷らしい傷はついていない。

須川という族長はおかしいなーといった調子で首を傾げるが、きつとナイフが外れたんだという予想を立て、再びナイフをその能力スカイハイで浮かばせる。

「じゃあ改めまして、死ねえ！！」

そして再度ナイフは叉神に向かう。が、やはりナイフは甲高い音とともに地に落ちた。それを目を丸くして見る須川族長。そして、

「ひ、ヒイイイ！？ば、化け物お！！」

腰が抜けたのか、その場で倒れ、這うように後退りする。もはやその姿に族長という威厳は微塵も無い。

「お助けえー！！」

本当に族長なのだろうか？そんな疑問さえ浮かんでくる。さて、この須川とかいう族長をどうしようか。

「んア？そうだ、良い事思いついたぜエ。」

確か吸血鬼は人通りは少ないけど人が多い所に現れると言った。それなら、

「オイ、助かりたきや今から俺が言う指示に従え。」

「は、はい！！」

「明日の晩。二、三十人ぐらい人を集めて元商店街に來い。來たら助けてやる。あと俺は吸血鬼じゃねエ。」

叉神は言いたい事だけ言うと廃工場を出る。そう、吸血鬼の習性を利用して自分の居る場所におびき出せばいいのだ。そうすれば今日みたいに吸血鬼を捜し回らずに済む。

「ハッ、我ながらナイスアイデア。」

そう自画自賛しながら歩くと湿っぽい嫌な風が又神に吹く。

見上げると赤い月は無く、黒い雲が空を覆っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7346h/>

四鬼～リンクする三頂点～

2011年1月22日18時57分発行